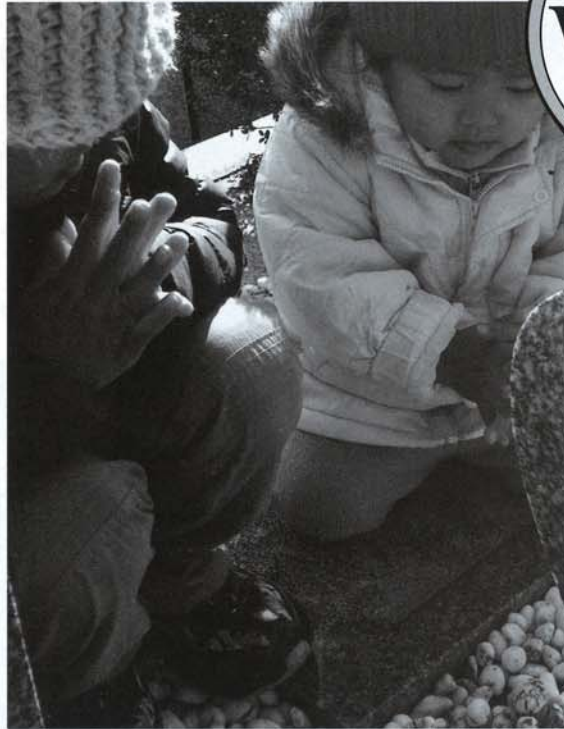


「もしも」の広場

VOL.15

- 「最近のお墓の事情」
- 「香典返しについて考えよう」
- 「火葬場予約にご注意ください」



最近のお墓の事情

死んだら誰もが入ることになるお墓。先祖を祀り、故人を偲ぶシンボルとしての意味もあります。ところが、そのお墓が存続の危機にさらされています。

最近メディアにも取り上げられるようになった「墓じまい」。増える無縁墓、不足するお墓、お墓不要論などなど。現代のお墓事情を考えてみました。

お墓の意味を考えよう

お墓は、二つの意味を持つと考えられています。ひとつは死者を埋葬するところであり、ふたつ目は死者の霊を祭る場所です。言いかえれば、前者は遺体処理の手段であり、後者は祭祀の要素なのです。

現代の一般的な石柱墓石は、供養塔が転じたものとして仏教の考え方を元にして仏教の考え方を元にして取り入れて魂のよりどころとして作ったとも言われており、正確なところはわかっていないのが実情です。ただ、仏教では亡くなった人を供養・回向しなければならぬと教えており、供養塔はそれを具体的に表すものとされ、現代のお墓のイメージに近いと考えます。

地方で増える無縁墓

家が絶えてお墓を守る人がいなくなり、無縁墓に

なってしまうということ。昔から多くあったと考えます。しかし現代では、お墓の場所が遠いことや、新たにお墓を持つ費用が大きいことなどが原因で、子孫がいても無縁墓になることが増えています。その割合は、どの墓地でもおよそ数%から1割以上と言われており、この傾向は地方に行くほど強くなっているそうです。たいていの場合、一定の期間を経た無縁墓は手続きを踏んで合祀し、その場所を再整備するといった対策がとられています。

無縁墓地ができる要因の一つとされるのが、独身で一人暮らしをしている人が増加し、お墓を継承する人がいないことがありません。お墓を受け継ぐのは民法上の祭祀財産にあり、相続の一環として行われる。言いかえれば、相続人を持たない人は将来お墓を守ってくれる人がいないということ。これ